

大学期における女子大学生の対人関係の形成と大学への適応

井森 澄江¹⁾ 伏見 友里²⁾

Formation of Close Relationships and Adjustment Among Contemporary Students in a Women's University

Sumie IMORI Yuri FUSHIMI

要旨

本研究の目的は、大学期における女子大学生の対人関係の形成を探ること、またその対人関係の形成と大学生活への適応との関連を明らかにすることである。対象は222名の女子大学生。フェイスシート、ARS (Affective Relationship Scale)、IPA (Inventory of Peer Attachment)、QOSL (Quality of Student Life) などからなる質問紙を実施した。その結果、ARSの分析から、女子大生の大多数が中核的な対象 (focal figure) と複数の重要な他者からなる人間関係の枠組みをもっていること。しかしごくわずかではあるが重要な他者を持たない一匹狼型もいること。そして井上・高橋 (1999) のARSに比べると、一匹狼型の割合は変わっていないが、恋人型は減り、友達型、多焦点型、母親型が増えていることが示された (井森ら (2015) のARS結果も同様の傾向を示した)。IPAの分析からは、女子大生が多少の葛藤、不信感を持ちながらも、コミュニケーションをかなり取り、信頼関係をほぼ築いていることが示された。また、ARS多焦点型は友人とコミュニケーションが良く取れており、友達型は友人への信頼が高いことが示された。QOSLの分析からは女子大生の体調は良く、充実感があり、将来展望も見えているのだが、自信がややないといった平均像が浮かび上がった。なお4年生では1年生より、体調もよく、自信をつけ、将来展望をもつようになっていた。さらに生活充実感と将来展望は一匹狼型が最も低く、多焦点型が最も高いことから、一匹狼型が適応に問題を持つこと、多焦点型が大学期女子大学生における適応的なタイプであることが示唆された。‘仕事を持ちながら、子育ても’という社会人としての女性のスタイルが一般化しつつある今、「恋人と友達」「母親と友達」等多くはないが複数の最重要対象を持つ多焦点型の増加は時代の要請であり、現在 (大学期) の対人ネットワークが将来 (社会人期) の親しい人間関係を調整していることを示唆した。

キーワード：適応、女子大学生、対人関係の形成、IPA (Inventory of Peer Attachment)、質問紙

目的

本研究の目的は、現代の大学期における女子大学生の対人関係の形成を探ること、またその対人関係の形成と大学への適応との関連を明らかにすることである。

大学への適応に関しては、高度経済成長期1960年代の大学・短期大学進学率10%から20%の上昇に伴って生じた国立大学教養学部大量留年問題、大学・短期大学進学率が30%に達した1970年の後半から80年代のスチューデントアパシー (学生の無気力症候群) 問題、

進学率45%に達した90年半ば以降の休学率の急増、退学率の増加に関連した不本意入学問題というように「受験戦争」後の大学生特有の問題として論じられることが多かった。不本意入学とは本人の意に添わない入学のことであり、大学への不適応感につながりやすい (佐藤2001¹⁾)。小林 (2000²⁾) は、不本意入学には、「第一志望不合格型」、合格可能性だけを重視して受かる大学に入学した「合格優先型」、自分の興味・適性よりも資格取得など就職の有利さを優先した「就職優先型」、自宅から通学できる、学費が安いなど経済的・地理的事情が優先された「家庭の事情型」、ある程度有名な大学だから、どの学部でもいいというような受験で合格した

1) 東京家政大学人文学部教育福祉学科 発達心理研究室

2) 東京家政大学人文学部教育福祉学科助教

「学歴目的型」の5つの型があるとしたうえで、それらに関連した入学後の様々な不本意感の要因を指摘した。2005年以降進学率は50%を超えており、2016年の進学率は57%である。大学入試方式も一般入試・センター入試・推薦入試・AO入試等々多様化し、大学は特別な学びの場というより、青年後期に開かれた学びの場としての意味合いを強めている。それとともに大学への不適応に関して従来の大学生特有の問題としての捉え方に加え、青年（中学生・高校生・大学生）の学校への適応の問題として捉える研究も多くなってきた。大久保（2005³⁾）は個人一環境の適合性の観点から中学生・高校生・大学生の学校への適応感の構造を明らかにするため、各学校で質問紙調査を実施、因子分析の結果「居心地の良さの感覚」、「課題・目的の存在」、「被信頼・受容感」、「劣等感の無さ」の4因子を見出した。学校段階ごとに因子分析を行っても、全体での因子分析を行っても同様の構造が見られ、各因子得点の性差及び学校段階差を検討した結果「被信頼・受容感」は大学生が中学生・高校生より、女子が男子より有意に高く、「居心地の良さの感覚」も女子が男子より有意に高い等の結果を示した。このような問題の捉え方と同時に大学適応の重要な要因として友人関係が指摘されるようになってきた。大学への進学動機と学校適応との関連を検討した磯部ら（2007⁴⁾）は「友人との関係」「教師との関係」「学業」の3因子からなる中高生用学生生活尺度（大久保ら2004⁵⁾）等を用いて、進学動機が適応感に与える影響は学科で異なるが、大学生活の中で最も重視される要因は友人との関係であることを示した。吉岡（2010⁶⁾）は、友人関係に関する問題が実際の学生相談の中で多くの割合を占め、友人関係は個人の悩みの原因であると同時に、悩みに直面したときのサ

ポート源でもあることを指摘した。2012年に行われたベネッセ教育総合研究所の大学生の学習・生活実態調査報告においても山田（2013⁷⁾）、谷田川（2013⁸⁾）は友人関係が大学生の学生生活の満足度を大きく左右する重要な要因となっていることを示している。現在の大学生の適応を論じるとき、友人関係の問題を外すことはできない。また、大学への適応が社会人としての適応につながることから、大学期における適応と友人関係を中心とした人間関係の様相を明らかにすることが求められる。

筆者らは前回の報告（井森ら2015⁹⁾）において、現代の女子大学生の対人関係の在り方と養護性の関連を検討する中で、大学生の友人関係を、友人関係の取り方（気遣い・ふれあい回避・群れ）と個人が持つ人間関係（愛情関係）の枠組みの中から捉えた。その結果として、①気遣いながら、群れる全般的傾向があること、②友だちを対人関係（愛情関係）の核としている友達型は他の型と比べて気遣うが、群れないという特徴があること等を示した。①からは「友達がいないように見られるのは耐えられない」ので友人を求めているが、信頼－被信頼といった深い関係を築くには至っていない現代の大学生の姿が浮かび上った。②からは個人が持つ人間関係（愛情関係）の枠組みと友人関係の深さとの何らかの関連があることが示唆された。

今回の報告では、現代の大学期における女子大学生の対人関係の形成（人間関係の構築）がどのようになされているのかを、前回の報告でも用いた個人が持つ人間関係（愛情関係）の枠組みの観点に加え、仲間愛着（友人関係の深さ、信頼－被信頼）の観点から探っていく。そしてそれらと大学への適応との関連について検討していく。

本報告の具体的目的は以下のとおりである。

- ① 大学期における女子大学生の対人関係の形成の様相を、個人の持つ「人間関係の枠組」「仲間への愛着」から探る。（「仲間への愛着」を測定する尺度の再構成の試みを含む。）
- ② 大学期における女子大学生の対人関係の形成すなわち人間関係の枠組み及び仲間への愛着の変化を探る。
- ③ 女子大学生の大学生活の質・大学への適応について明らかにするとともに、大学期におけるその変化を探る。
- ④ そのうえで、大学期における現代の対人関係の形成と大学への適応の関連について検討する。

方法

1. 対象者：首都圏A女子大学1年入学生77名、4年進級生78名、4年卒業生67名
合計222名 平均年齢20.35歳（SD1.90）
（大学期における変化を横断的に探るため、大学入学時の1年生、大学最終学年に進級した4年生及び就職活動を終え数日後には社会人1年生となる卒業時の4年生を今回の対象とした）
2. 実施時期：2016年3月下旬～4月上旬（1年生のQOSL（Quality of Student Life）以外の実施）、7月下旬（1年生のQOSLを実施）
3. 実施方法：クラス懇談会時に質問紙を配布、回答を依頼し、その場で回収した。その際、教示としてこの調査は成績とは関係がないこと、回答を強制するものではないこと等を伝えた。
4. 質問紙の構成：フェイスシート、多肢選択・自由記述項目、評定尺度からなる。
（1）フェイスシート（学籍番号、年齢、家族構成、現在の居住形態等）
（2）多肢選択・自由記述項目：大学進学・在学理由、卒業後の希望進路・生き方等
（3）評定尺度内容：ARS愛情の関係尺度

（Takahashi, 1990¹⁰, 2000¹¹）12項目（5段階評定）、IPPA（The Inventory of Parent and Peer Attachment）（Armsden&Greenberg, 1987）¹² 28項目と25項目（4段階評定）、QOSL（Quality of Student Life）大学生生活の質尺度（中澤ら2007¹³）32項目（2段階評定）、SPSI-R（Social Problem Solving Inventory-R）社会的問題解決力尺度（中澤ら2007）（5段階評定）、同一性地位判定尺度12項目（加藤, 1983¹⁴）（6段階評定）。

本報告では主に（3）の1）ARS愛情の関係尺度、2）IPA仲間への愛着尺度（IPPAのうちのInventory of Peer Attachment）、3）QOSL大学生生活の質・適応尺度について取り上げる。また4）SPSI-R社会的問題解決力尺度についても一部取り上げる。同一性地位判定尺度については、またSPSI-R社会的問題解決力尺度の詳細については伏見ら（2017¹⁵）参照のこと。

1）ARS愛情の関係尺度（Takahashi, 1990, 2000, 高橋, 2002¹⁶）：「人間関係の枠組み」とその強さの測定のために、Takahashi（2000）により愛情の関係（人間関係）の枠組みを測定するために開発された「愛情の関係尺度（Affective Relationships Scale:ARS）」を使用した。（詳細は井森ら2015参照のこと）

愛情の関係とは人間関係の中の中核的で比較的安定した部分を指し、これは人間の生存や安寧にとって不可欠な情動的な関係である（高橋, 2002, 2007¹⁷, 2010¹⁸）。ARS愛情の関係尺度における愛情の関係とは「重要な他者と情動的な交渉をしたいという要求を充足させる人間関係」と定義されるもので、これには「情動的支えを求める要求」、「情動や経験を共有したいという要求」、「他者を養護したいという要求」という三種類の要求が含まれる。この愛情の関係モデルに基づく人間関係（愛情の関係）の枠組

みは、こうあってほしい、こうしたいという関係についての主観的な表象であり、この表象に基づいて、ある状況の対人行動がなされると仮定できる。愛情の関係モデルにおける人間関係の枠組みは「個人は多様な心理的機能を割り振りながら、自分にとって重要だと選んだ複数の対象からなる枠組みを構築している」「この枠組は階層的な構造をなしており、どの対象かが相対的に多くの機能を割り振られ中核的な対象となっている」「枠組みは変容する可能性を持つ」といった性質を持つ。

今回は大学生が調査対象であることから、愛情の要求を向ける対象を、母親、父親、最も親しいきょうだい、同性の最も親しい友達、恋人、尊敬する人、その他で重要な人の7対象とし、6種の愛情の関係の心理的機能を記述した12の質問項目（6機能×2項目）について、各対象に対する愛情の要求の強さの程度を5段階（5：そう思う～1：思わない）で評定してもらった。得点の範囲は各対象別に12～60になる。具体的な6つの愛情の関係の心理的機能とその項目の例は以下の通り。なお〇〇には母親、友だち等、各対象名が入る。1. 近接を求める（できることならいつも〇〇と一緒にいたい）、2. 心の支えを求める（〇〇が私の支えであってほしい）、3. 行動や存在の保証を求める（自信がわくように〇〇に「そうだ」と言ってほしい）、4. 激励や援助を求める（何かをする時には〇〇が励ましてくれるとよい）、5. 情報や経験を共有する（〇〇とはお互いの喜びを分かち合いたい）、6. 養護する（〇〇が困っている時には助けてあげたい）

2) IPPA (Inventory of Parent and Peer Attachment)：大学生の仲間への愛着を測定するために、Armsden&Greenberg (1987) により青年期の親および仲間への愛着を測定するた

めに開発されたIPPA (Inventory of Parent and Peer Attachment) のうちの仲間への愛着 (Inventory of Peer Attachment) を使用した。

IPPA (Armsden&Greenberg,1987) は愛着に関するBowlbyの理論に基づき、青年期の愛着対象への応答性や接近可能性に関する信頼感や愛着対象への怒り、愛着対象からの無関心について評価する60項目（親への愛着31項目、仲間への愛着29項目）をもとに大学生を対象に尺度化したもので、信頼 (trust) 10項目、コミュニケーション (communication) 10項目、疎外 (alienation) 8項目の3下位尺度からなる親への愛着 (Inventory of Parent Attachment) 尺度と信頼 (trust) 10項目、コミュニケーション (communication) 8項目、疎外 (alienation) 7項目の3下位尺度からなる仲間への愛着 (Inventory of Peer Attachment) 尺度からなる。

今回は仲間への愛着 (Inventory of Peer Attachment) 25項目について4段階（4：当てはまる～1：当てはまらない）で評定してもらった。

親への愛着 (Inventory of Parent Attachment) 尺度に関してはこれまで日本でも藤井 (1994)、井上ら (2006¹⁹⁾) により研究され日本語版も開発されている。一方、仲間への愛着 (Inventory of Peer Attachment) 尺度に関しては、ほとんど研究がない。IPPA (1987) の親への愛着 (Inventory of Parent Attachment) 尺度化の問題点としては複数の因子に対して負荷が大きい項目が多いことがあげられる(井上ら, 2006)。仲間への愛着 (Inventory of Peer Attachment) 尺度においても複数の因子に対して負荷が大きい項目が多く、負荷量の絶対値の差が0.1未満の項目が4項目もある。例えば、項目3はtrustで.432、communicationで.484という負荷量である。そのうえ、この項目は負荷量の絶対

値の大きさではなく項目内容によってtrustに分類されたと考えられる（最終的にどの項目がどの因子に分類されたかの記述はない）。そこで、仲間への愛着（Inventory of Peer Attachment）尺度に関して今回の全対象データに基づいて因子分析を行い、今回の研究で使用する尺度を再構成した（再構成した尺度項目を分析に使用した）。

3）QOSL（Quality of Student Life）：大学生の大学への適応の査定として、福盛ら（2002^{20）}によって開発された45項目からなる大学生のQOLを測定する尺度「大学生活チェックカタログ45（QOSL）」に関して、677名の大学生データに基づき因子分析を行って再構成された尺度（中澤ら2007）を使用した。このQOSL（中澤ら2007）は生活充実感13項目（「大学生活が充実している」、「この大学は居心地がいい」等）、自信欠如6項目（「ちょっとしたことですぐクヨクヨする」、「何をするにも自信がない」等）、体調不良7項目（「体調不良に悩まされている」、「いつも疲れている」、「学生生活を送るうえで経済的な不安がある」等）、将来展望6項目（「将来どんな職業に就くのか、ある程度の方角を決めている」、「少なくとも2,3の講義やゼミに意欲的に出ている」等）の4下位尺度32項目からなる。回答は2件法（はい、いいえ）とし、各項目で各下位尺度名に即した回答をした場合に1点を与えた。

生活充実感は13点満点、自信欠如6点満点、体調不良7点満点、将来展望6点満点である。なお、4年卒業生の将来展望6項目に関しては、文頭に「3, 4年になった時には」という前提を加えた上、項目の文を現在形から過去形に直したものをを用いた（「3, 4年になった時には将来どんな職業に就くのか、ある程度の方角を決めていた」、「3, 4年になった時には少なくとも

も2,3の講義やゼミに意欲的に出ている」等）。また、体調不良7項目のうちの1項目に関しても文頭に「大学時代には」という前提を加えた上、項目の文を現在形から過去形に直したものをを用いた（「大学時代、学生生活を送る上で経済的な不安があった」）。

4）SPSI-R（Social Problem-Solving Inventory-Revised）；大学への適応の補助指標として、D’Zurilla, Nezu, & Maydeu-Olivares（2002^{21）}のSPSI-R52項目を677名の大学生に実施し、得られたデータに基づいて因子分析を行い再構成された39項目からなる尺度SPSI-R（中澤ら2007）を使用した。このSPSI-R（中澤ら2007）は問題志向：肯定的問題定位（PPO）3項目（「難しい問題に直面しているとき、一生懸命にやればそれを解決することができると思う」、「否定的問題定位（NPO）9項目（「難しい問題に会うととても混乱する」等）、問題解決スタイル：合理的問題解決（RPS）19項目・衝動／不注意型解決（ICS）4項目・回避的問題解決（AS）4項目からなる。（詳細は伏見ら2017参照のこと）

結果と考察

1. 対人関係の形成

（1）対人関係の類型

Takahashi（1990, 2000）に基づき、7対象（母親・父親・友達・恋人・きょうだい・尊敬する人・その他の重要な人）のARS 6心理的機能得点の合計（12～60）を求め、最高合計得点の対象を個人の中核的な人ということで対人関係の類型を決定、36点以下を一匹狼型とした。また、37点以上の最高合計得点の対象が複数いた場合は多焦点型とした。今回の被調査者222名、のうちARSの記入に欠損のあった1名を除いた221名の類型とその人数（％）を、そ

れに属する人数の多い類型順に学年別に表1に示した。なお、多焦点型は、他の類型が中核的な人が一人であるのに対し、中核的な人が複数いる型であり、「どのような人から構成されているのか」「何人で構成されているか」といった観点から細分類することができる。この今回の多焦点型の細分類の結果については、多焦点型についてとトピック立てし、この項の最後に示した。

<全体的傾向>

今回の被調査者の対人関係類型は友達型83名(37.6%)、多焦点型50名(22.6%)、母親型35名(15.8%)、恋人型34名(15.4%)、きょうだい型9名(4.1%)、一匹狼型6名(2.7%)、父親型2名(0.9%)、尊敬型2名(0.9%)であった。これは前回の2014年の調査(井森ら2015)とほぼ同じ傾向を示していた。また、井上・高橋(1999²²⁾)の女子大学生1720名に4対象(母親・父親・友達・恋人)の心理的機能を問うという方法で実施された研究結果—友達型26.0%、多焦点型15.3%、母親型8.5%、恋人型40.2%、父親型0.6%、一匹狼型2.5%—と比較すると、恋人型が少なく、友達型、多焦点型、母親型が多くなっていた。今回も前回調査同様、井上・高橋(1999)に比べ家族との同居者が多く、一人暮らしか家族と同居かという居住形態がこの変動に関係しているのかもしれない。ただし一匹狼型の割合は井上・高橋(1999)の研究結果とほぼ同じであった。

<学年傾向>

各学年とも、友達型が一番多くの割合を占めていた。ただし、その割合は1年に比べて4年ではやや少なかった。逆に、恋人型は1年に比べて4年で多くなっていた。母親型もその割合は1年より4年の方がやや多くなっていた。4年になると同性の先輩社会人として母親を認識

しなおしていくことがこの傾向の背景にあると思われる。

多焦点型について

今回の調査で井上・高橋(1999)に比べて増えている多焦点型50名のうち友だちを含むものは41名、母親を含むものは28名、恋人を含むものは21名であり、これを単純にそれぞれの名称型に加算すると、友達型56.1%、母親型28.5%、恋人型24.9%となる。この数値での比較においても井上・高橋(1999)に比べ恋人型が少なく、友達型、母親型が多くなっていた。また、多焦点型は2人型～6人型に分類できた。多焦点型の多く(33名66%)は2人型であった。またそのうち友達を含む2人型は27名、最も多い組み合わせは「友達と恋人」11名、次に多いのが「友達と母親」6名であった。多焦点型は高橋においては「どの対象に対しても得点が高くだれが中核になっているかわからないタイプ」とされ、類型の出現比率の変化のグラフにおいて、「だれに対しても得点が低い一匹狼型」と一緒に「その他」として分類されている(高橋2007等)。「最高得点者が二人の場合のTie-type, 3人以上の場合のMultiple-typeを区別することも可能である」と述べられていてもOthersとしてまとめ、一匹狼型もOthersに含めて世代差性差が比較されている(高橋2001)。「一匹狼型は孤独、引っ込み、無秩序な愛着であるDタイプなどとして注目されてきた人たちに近いであろう」(高橋2007)と述べられており、Others多焦点型(とくにMultiple-type)は何らかの問題を持つ傾向があるという意味を含め、しかしTie-typeとMultiple-typeを区別せず、一緒に「その他」と分類された(ただし適応に問題があると明示されたのは一匹狼型のみである)。しかし、現在の女子大学生の類型において、多焦点型(少なくとも今回多く見られた「2人

型」)は逆に、適応的な類型と考えられる。仕事をもちながら、子育てもという社会人としての女性のスタイルが一般化しつつある今、「恋人と友達」「母親と友達」という多くはないが複数の最重要対象を持つことは、そのスタイルを支える。現代の大学期の女子大学生にとって

多焦点型は問題を含むどころか、適応的な人間関係を構築している姿を示すと思われる。1. (3) 対人関係の類型 (ARS) と仲間への愛着 (IPA)、3 (1) 対人関係の類型と適応の節でこれについて検討する。

表1 対人関係の各類型 学年別人数とその割合

対人関係の類型	1年入学生		4年進級生		4年卒業生		合計	
友達型	34	(44.2%)	28	(35.9%)	21	(31.8%)	83	(37.6%)
多焦点型	23	(29.9%)	11	(14.1%)	16	(24.2%)	50	(22.6%)
母親型	10	(13.0%)	14	(17.9%)	11	(16.7%)	35	(15.8%)
恋人型	6	(7.8%)	17	(21.8%)	11	(16.7%)	34	(15.4%)
きょうだい型	3	(3.9%)	4	(5.1%)	2	(3.0%)	9	(4.1%)
一匹狼型	1	(1.3%)	3	(3.8%)	2	(3.0%)	6	(2.7%)
父親型	0		0		2	(3.0%)	2	(0.9%)
尊敬型	0		1	(1.3%)	1	(1.5%)	2	(0.9%)
合計	77		78		66		221	

(2) 仲間への愛着

1) IPA (Inventory of Peer Attachment) の因子分析

仲間愛着IPA尺度を再構成するため、IPA25項目に関して3因子を採用し因子分析を行った。共通性の低い項目、複数の因子に負荷が高い項目等を削除し、最終的にそれぞれ9項目、4項目、3項目から構成される3尺度全16項目を得た(表2)。第1因子は「友達は私が困っている問題を話すように励ましてくれる」「友達は私が何かに困っていると思った時には、そのことについて尋ねてくれる」などの項目で負荷が高く「コミュニケーション」と命名した。第2因子は「私は友達を信頼している」「私が胸の内を明かしたいとき友達は当てにできる」などの項目に負荷が高く「信頼」と命名した。そして第3因子は「友達が思っている以上に私は腹を立てている」「友達はわけもなく私にイ

ライラしているようだ」などの項目に負荷が高く、「疎外」と命名した。ただし「疎外」3項目は全て「怒り」に関するものであった。3つの因子はArmsden&Greenberg(1987)と同様に解釈することが可能だと思われる。しかし、特に「疎外」に関しては項目数も3項目と少なく、「疎外」尺度として、またそれを含む仲間愛着IPA尺度として問題を残していると思われる。因子間相関はコミュニケーション-信頼が.73、コミュニケーション-疎外が-.31、信頼-疎外が-.36であった(表3)。Armsden&Greenberg(1987)では順に.76、-.40、-.46となっておりこれと比べると、絶対値は若干小さくなっている。まだ検討していく必要があると思われる尺度であるが今回は再構成した3下位尺度18項目からなるこの尺度を分析に用いた。

表2 仲間愛着 (IPA) の因子分析 (主因子法プロマックス回転後の因子負荷量)

No	項目内容	コミュニケーション	信頼	疎外	共通性
I. コミュニケーション (9 項目) $\alpha = .864$					
7	友達は私が困っている問題を話すように励ましてくれる	.823	-.118	-.039	.567
25	友達は私が何かに困っていると思った時には、そのことについて尋ねてくれる	.781	-.104	.038	.488
2	私が何かに怒っているとき、友達は感じ取ってくれる	.642	-.157	-.159	.359
24	私は自分の問題や困ったことを友達に話す	.598	.243	.226	.559
15	私が何かに腹を立てていると、友達はそれを理解しようとしてくれる	.590	.243	.226	.472
1	気にかけている問題について、友達の意見を聞きたい	.575	.010	.149	.307
16	友達は私が自分自身のことをより理解できるように助けてくれる	.571	.146	-.026	.482
6	友達は私のことをわかってきている	.504	.202	-.154	.538
12	友達は私が言わなければいけないことに耳を傾けてくれる	.462	.088	.061	.263
II. 信頼 (4 項目) $\alpha = .769$					
20	私は友達を信頼している	.060	.829	-.007	.767
19	私が胸の内を明かしたいとき友達はあてにできる	.060	.707	.071	.667
14	友達とはかなり話しやすい	.103	.570	-.161	.523
4	問題を友達に打ち明けても、自分が恥ずかしい・自分が愚かだという思いにさせられる (逆転項目)	.142	-.488	.099	.193
III. 疎外 (3 項目) $\alpha = .724$					
22	友達が思っている以上に私は腹を立てている	-.098	.099	.762	.576
18	私は友達に腹が立っている	.071	-.114	.652	.457
23	友達はわけもなく私にイライラしているようだ	.142	-.488	.594	.395
	固有値	6.191	1.854	1.116	
	寄与率	38.697	11.59	6.974	
	累積寄与率	38.697	50.286	57.26	

表3 仲間愛着 (IPA) の因子相関行列

因子	コミュニケーション	信頼	疎外
コミュニケーション	1.000	—	—
信頼	.732	1.000	—
疎外	-.308	-.362	1.000

2) 仲間への愛着IPA

再構成した仲間への愛着IPA尺度の下位尺度項目平均得点を学年ごとに表4に示した。

<全体傾向>

各下位尺度得点の範囲は1～4であり、数値からは平均的にはあまり多くはないがある程度の疎外感を持ち、コミュニケーションはほぼとれており、信頼感もほぼ持っていることが示された。疎外尺度は「怒り」に関連した項目から構成されており、これが低すぎることは他者に

対する無関心、対人交渉の乏しさを示していると思われる。その意味で、今回の全体傾向からは、現代の女子大学生が多少の葛藤、不信感を持ちながらも、コミュニケーションをかなり取り、信頼関係をほぼ築いていることが読み取れた。

<学年傾向>

仲間愛着に関して分散分析を行ったが、どの下位尺度項目平均得点とも学年間に有意差は見られなかった。学年で違いは見られなかった。

表4 学年別仲間への愛着IPA各下位尺度項目平均得点 (SD)

仲間愛着の 3下位尺度	1年入学生 n=77 項目得点 (SD)	4年進級生 n=78 項目得点 (SD)	4年卒業生 n=67 項目得点 (SD)	合計 n=222 項目得点 (SD)	F 値	p
コミュニケーション	3.10 (0.51)	3.16 (0.55)	3.12 (0.44)	3.13 (0.50)	.32	.73
信頼	3.08 (0.41)	3.12 (0.45)	3.07 (0.32)	3.09 (0.40)	.24	.79
疎外	2.02 (0.36)	1.99 (0.28)	2.06 (0.45)	2.02 (0.36)	.73	.49

(3) 対人関係の類型 (ARS) と仲間への愛着 (IPA)

表5に、対人関係各類型の仲間愛着IPA 3下位尺度項目平均得点 (SD) を示した。対人関係の類型と仲間愛着IPA 3下位尺度との関連を検討するため、IPA下位尺度の類型平均得点の分散分析を行った。コミュニケーション尺度得点 ($F(7,213) = 4.218, p < .01$) と信頼尺度得点 ($F(7,213) = 4.013, p < .01$) で対人関係の類型間に有意差が示された。疎外尺度得点では類型間に有意差はなかった ($F(7,213) = .610, n.$

s.)。コミュニケーション尺度得点は多焦点型、恋人型、友達型で数値が高く、一匹狼型、きょうだい型、母親型では数値が低かった。Tukey法による多重比較の結果、多焦点型と一匹狼型、きょうだい型、母親型の平均得点の間には有意差が見られた。また、友達型と一匹狼型、きょうだい型、母親型の平均得点の間には有意傾向が見られた。信頼尺度得点は友達型で数値が高く、きょうだい型、一匹狼型で低かった。Tukey法による多重比較の結果、友達型ときょうだい型、母親型の平均得点の間には有

意差が見られた。また、友達型と一匹狼型の平均得点の間には有意傾向がみられた。一匹狼型、きょうだい型、母親型は多焦点型、友達型に比べて仲間とのコミュニケーションに乏しいといえる。また友達型は一匹狼型、きょうだい型、母親型に比べ仲間への信頼が高いといえる。疎外得点には類型間に有意差はないが、一匹狼型は疎外得点が最も低く、仲間への関心の低さを窺わせた。またコミュニケーション得点は多焦

点型が最も高く、多焦点型が大学期における適応的なタイプであることが示唆された。コミュニケーション得点はこの多焦点型、恋人型について友達型が高く、信頼得点は友達型が最も高かった。同性の最も親しい友達に強い愛情欲求を示しているものほど、仲間愛着の信頼得点が高かった。これは仲間への愛着IPA尺度の併存的妥当性を示しているとも考えられる。

表5 対人関係の類型別 仲間愛着IPA下位尺度項目平均得点 (SD)

対人関係 の類型	1. 友達型	2. 多焦点型	3. 母親型	4. 恋人型	5. きょうだい型	6. 父親型	7. 尊敬型	8. 一匹狼型	合計	F 値	p	群間比較
ARS	n = 83	n = 50	n = 35	n = 34	n = 9	n = 2	n = 2	n = 5	n = 221			
コミュニ ケーション	3.20 (0.46)	3.25 (0.53)	2.90 (0.42)	3.21 (0.48)	2.70 (0.53)	3.28 (0.71)	2.67 (0.25)	2.61 (0.25)	3.12 (0.50)	4.22	.00**	(3<2,5<2,8<2)* (3<1,5<1,8<1)†
信頼	3.21 (0.30)	3.10 (0.39)	2.94 (0.43)	3.10 (0.43)	2.72 (0.57)	3.13 (0.18)	2.88 (0.32)	2.75 (0.32)	3.09 (0.40)	4.01	.00**	3 < 1*.5 < 1** 8 < 1†
疎外	2.00 (0.30)	2.05 (0.35)	2.08 (0.40)	2.00 (0.40)	1.93 (0.28)	2.00 (0.00)	2.17 (0.71)	1.83 (0.28)	2.02 (0.35)	.61	.75	

(5名未満の類型の尺度項目平均得点は参考数値として斜体で示した) †p<.10 *p<.05 **p<.01

2. 適応

(1) QOSL

大学への適応の指標として用いたQOSL各下位尺度の平均得点 (SD) を学年別に表6に示した。また、比較のために677名の男女大学生を対象とした中澤ら (2007) の結果を斜体字で表6に併記した。なお、下位尺度の生活充実感 は13点満点、体調不良は7点満点、自信欠如と将来展望は6点満点である。

<全体傾向>

今回の対象は中澤ら (2007) の男女学生合計と比べると体調不良は低く、生活充実感が高く、将来展望もやや高い、しかし自信欠如は高かった。そして、体調は良く、充実感があり、将来展望も見えているのだが、自信がややないといった平均像が示された。ただ、自信欠如とい

う点に関して中澤ら (2007) の結果でも、男子大学生の2.83 (1.84) にくらべ女子大学は3.27 (1.76) と高く、女子大学生はやや自信がないという傾向が今回の結果でも示されたといえる。

<学年傾向>

QOSL各下位尺度の学年平均値差の検定を行った。その結果、生活充実感を除いた自信欠如 (F (2,218) =3.115,p<.05)、体調不良 (F (2,218) =3.730,p<.05)、将来展望 (F (2,218) =6.020,p<.01) で有意差が示された。Tukey法による多重比較の結果、自信欠如で1年新入生と4年進級生との間に有意傾向がみられた。1年新入生は4年進級生より自信欠如得点が高い。また体調不良においても1年新入生と4年卒業生との間に有意差がみられ、1年新入生は4年卒業生より

体調不良得点が高いことが示された。将来展望でも1年新生と4年進級生との間に、また1年新生と4年卒業生との間に有意差が見られ、4年進級生、4年卒業生は1年進級生に比

べて将来展望得点が高かった。1年入学生に比べ4年生は自信を持つようになって、体調もよく、将来展望もより高く持つようになっていることが示された。

表6 学年別 QOSL 各下位尺度の平均得点 (SD)

	1. 1年入学生 n = 76	2. 4年進級生 n = 78	3. 4年卒業生 n = 67	合計 n = 221	07年 男子学生 n = 357	07年 女子学生 n = 320	07年 学生合計 n = 677	F 値	p	群間比較
生活充実感 13点満点	8.88 (2.46)	9.44 (2.96)	9.03 (3.02)	9.12 (2.81)	<i>7.80</i> (3.10)	<i>8.39</i> (3.06)	<i>8.08</i> (3.09)	.80	.45	
自信欠如 6点満点	3.88 (1.66)	3.24 (1.90)	3.27 (1.75)	3.47 (1.79)	<i>2.83</i> (1.84)	<i>3.27</i> (1.76)	<i>3.04</i> (1.82)	3.12	.05*	2 < 1 †
体調不良 7点満点	2.67 (1.68)	2.12 (1.67)	1.93 (1.80)	2.25 (1.74)	<i>2.77</i> (1.86)	<i>2.86</i> (2.02)	<i>2.81</i> (1.94)	3.73	.03*	3 < 1 *
将来展望 6点満点	3.74 (1.59)	4.53 (1.63)	4.49 (1.48)	4.24 (1.61)	<i>3.73</i> (1.69)	<i>4.12</i> (1.64)	<i>3.91</i> (1.68)	6.02	.00**	1 < 2 **, 1 < 3 *

(中澤ら (2007) の男女大学生の結果を斜体字で示した) †p<.10 *p<.05 **p<.01

3. 対人関係の形成と適応

(1) 対人関係の類型と適応

1) 対人関係の類型と QOSL

表7にQOSLの記入に欠損のあった友達型1名を除いた各類型のQOSL下位尺度平均得点を示した。大学への適応の指標としてのQOSLの4下位尺度—生活充実感(13項目)、自信欠如(6項目)、体調不良(6項目)、将来展望(7項目)—得点について類型間の平均値差の検定を行ったが、どのQOSL下位尺度においても類型間で得点に有意差は示されなかった。数値と

してみると、生活充実感尺度得点は多焦点型、友達型で高く、一匹狼型は低かった。将来展望尺度得点は多焦点型、きょうだい型、母親型で高く、一匹狼型は低かった。自信欠如尺度得点は恋人型、一匹狼型でやや高かった。体調不良尺度得点はどの類型も低いと特にきょうだい型が低かった。尺度得点に類類型で有意差はないものの、多焦点型は生活充実感、将来展望が最も高く、多焦点型が大学期女子大学生の適応的なタイプであることが示唆された。

表7 対人関係の類型別 QOSL 下位尺度平均得点 (SD)

	1. 友達型 n = 83	2. 多対象型 n = 50	3. 母親型 n = 35	4. 恋人型 n = 34	5. きょうだい型 n = 6	6. 父親型 n = 2	7. 尊敬型 n = 2	8. 一匹狼型 n = 5	合計 n = 222	F 値	p
生活充実感 13点満点	9.23 (2.74)	9.52 (2.73)	9.06 (2.59)	8.59 (3.12)	9.11 (3.55)	<i>11.00</i> (1.41)	<i>8.50</i> (3.54)	6.67 (2.25)	9.10 (2.81)	1.14	.34
自信欠如 6点満点	3.37 (1.75)	3.40 (1.64)	3.20 (1.98)	4.03 (1.85)	3.00 (1.66)	<i>4.00</i> (1.41)	<i>3.50</i> (2.12)	4.00 (2.19)	3.46 (1.79)	.83	.58
体調不良 7点満点	2.22 (1.54)	2.26 (1.85)	2.06 (1.68)	2.74 (1.83)	1.11 (1.45)	<i>0.50</i> (0.71)	<i>3.50</i> (0.71)	2.17 (2.64)	2.23 (1.72)	1.48	.18
将来展望 6点満点	4.07 (1.59)	4.62 (1.35)	4.43 (1.60)	3.88 (1.84)	4.56 (1.88)	<i>6.00</i> (0.00)	<i>5.00</i> (1.41)	3.00 (1.67)	4.24 (1.61)	1.83	.08

(5名未満の類型の尺度平均得点は参考数値としてイタリック体で示した)

2) 対人関係の類型とSPSI-R

適応に影響すると考えられる日常で出会う問題に対処する構え（肯定的・否定的）と方略を測定するSPSI-Rを大学適応の補助指標とした。

表8に各類型のSPSI-R下位尺度項目得点を示した。対人関係の類型についてSPSI-R下位尺度項目平均値の差の検定を行ったところ、RPS尺度項目得点に類型間で有意差が示された($F(7,213) = 2.556, p < .05$)。Tukey法による多重比較の結果、合理的問題解決RPS尺度項目

得点で母親型と恋人型の間に有意差がみられた。恋人型は母親型に比べて有意にRPS尺度項目得点が低かった。これ以外、SPSI-R下位尺度には類型間で有意差は見られなかった。ただし、問題を回避する方略AS尺度項目平均得点に関して、数値的には一匹狼型が他の類型より高い。回避方略ASは不適応に直結する方略と考えられ、一匹狼型の適応困難傾向が示唆された。

表8 対人関係の類型別SPSI-R下位尺度項目平均得点 (SD)

	1. 友達型 n = 83	2. 多対象型 n = 50	3. 母親型 n = 35	4. 恋人型 n = 34	5. きょうだい型 n = 6	6. 父親型 n = 2	7. 尊敬型 n = 2	8. 一匹狼型 n = 5	合計 n = 222	F値	p	群間比較
RPS	2.35 (0.51)	2.52 (0.60)	2.64 (0.51)	2.23 (0.57)	2.29 (0.43)	2.63 (0.22)	3.11 (0.15)	2.25 (0.48)	2.42 (0.55)	2.56	.02*	4 < 3*
NPO	2.31 (0.67)	2.44 (0.75)	2.19 (0.77)	2.28 (0.84)	2.43 (0.92)	2.67 (0.47)	2.72 (0.55)	2.46 (1.14)	2.33 (0.75)	.54	.80	
ICS	2.01 (0.74)	2.09 (0.78)	1.74 (0.92)	1.90 (0.75)	2.03 (0.57)	1.75 (0.00)	2.13 (0.88)	1.96 (0.62)	1.97 (0.77)	.70	.67	
AS	1.84 (0.70)	1.72 (0.54)	1.45 (0.67)	1.79 (0.90)	1.61 (0.55)	1.25 (0.00)	1.00 (0.71)	2.13 (0.75)	1.73 (0.70)	1.91	.07	
PPO	2.49 (0.71)	2.45 (0.70)	2.63 (0.72)	2.33 (0.73)	2.67 (0.85)	2.33 (0.94)	2.17 (0.24)	2.33 (1.25)	2.48 (0.73)	.59	.77	

(5名未満の類型の尺度項目平均得点は参考数値としてイタリック体で示した) * $p < .05$

(2) 仲間愛着と適応

1) 仲間愛着とQOSL

表9に仲間愛着IPAの下位尺度とQOSL下位尺度の相関を示した。

仲間愛着コミュニケーション得点、信頼得点と生活充実感得点との間に正の相関がみられた。また、仲間愛着コミュニケーション得点と将来展望得点との間にも弱い正相関がみられ

た。仲間愛着コミュニケーション、信頼が高いと大学にうまく適応する傾向があることが示唆された。一方、仲間愛着疎外得点には体調不良得点との間に弱い正相関がみられた。仲間愛着疎外は相関の方向でみると、生活充実感・将来展望とは負、自信欠如・体調不良とは正であり、仲間愛着疎外が高いと大学にうまく適応できない傾向があることが示唆された。

表9 仲間愛着IPAの下位尺度とQOSL下位尺度の相関

	生活充実感	自信欠如	体調不良	将来展望
コミュニケーション	.43 **	-.05	-.04	.15 *
信頼	.33 **	-.05	.01	.12
疎外	-.09	.09	.17 *	-.07

*p<.05 **p<.01

2) 仲間愛着とSPSI-R

表10に仲間愛着IPAの下位尺度と大学適応の補助指標SPSI-R下位尺度の相関を示した。仲間愛着コミュニケーション得点と肯定的問題定位PPO得点の間に弱い正相関がみられた。

一方、仲間愛着疎外得点是否定的問題定位NPO得点と正相関がみられた。仲間愛着コミュニケーションが高いと問題が起こってもそれを解決できる、自分にはその能力があると考え、

問題に対して積極的な姿勢をもつ傾向がある。逆に仲間愛着疎外が高いと問題は解決不可能、自分には解決能力はないと考え、問題を脅威としてとらえ、問題の取り組みに消極的・否定的な姿勢をとる傾向がある。そういった傾向が大学生活への適応に関連する可能性が示唆された。

表10 仲間愛着IPAの下位尺度とSPSI-R下位尺度の相関

	RPS	NPO	ICS	AS	PPO
コミュニケーション	.04	-.08	.11	-.00	.16 *
信頼	-.01	-.06	.13	.03	.11
疎外	.12	.20 **	.07	.06	.06

*p<.05 **p<.01

まとめと今後の課題

1. 大学期における現代女子大学生の対人関係の様相

今回の調査でも2014年の調査（井森ら2015）と同様、大多数の者が複数の重要な他者をもっていることと同時に、重要な他者を持たない一匹狼型が3%程度いることが確かめられた。井上・高橋（1999）に比べ、対人関係の類型に関して、一匹狼型の割合は変わっていないが、恋人型は減り、友達型、多焦点型、母親型が増えていた。今回の調査での多焦点型はその三分の二が2人型（恋人と友達、母親と友達、等）で

あった。この多焦点型の増加は、仕事も子育てもという社会人としての女性のスタイルの変化に対応する現代の女子大学生の適応的な人間関係の構築の姿を反映したものと考えられる。これを＜対人関係の類型と仲間愛着＞、＜対人関係の類型と大学適応＞の観点から検討した。

学年傾向としては、各学年とも、友達型が一番多くの割合を占めていた。ただし、その割合は1年に比べて4年ではやや少なかった。逆に、恋人型は1年に比べて4年で多くなっていた。仲間との愛着に関しては、再構成した仲間愛着尺度の下位尺度得点から、多少の葛藤、不信感

を持ちながらも、コミュニケーションをかなり取り、信頼関係をほぼ築いていることが読み取れた。

仲間愛着尺度得点に学年差はみられなかった。

〈対人関係の類型と仲間愛着〉仲間愛着コミュニケーション尺度と信頼尺度において類型間で有意差がみられ、コミュニケーション得点は多焦点型が最も高く、多焦点型が大学期における適応的なタイプであることが示唆された。コミュニケーション得点はこの多焦点型、恋人型について友達型が高く、信頼得点は友達型が最も高かった。同性の最も親しい友達に強い愛情欲求を示しているものほど、仲間を信頼していることが示された。

2. 大学期における現代女子大学生の大学への適応

大学への適応の指標として用いたQOSL得点から体調は良く、生活充実感があり、将来展望も見えているのだが、自信がややないといった平均像が示された。自信の無さは女子大学生の特徴でもあり、大学への適応はおおむね良好と考えられた。また、生活充実感を除いた自信欠如、体調不良、将来展望得点で学年間に有意差がみられ、1年入学生に比べ4年生はより自信を持つようになって、体調もよく、将来展望もより高く持つようになっていることが示された。

3. 大学期における対人関係の形成と適応

仲間愛着と大学適応の関連についてQOSL生活充実感とIPAコミュニケーション、信頼との間に正の相関、また将来展望とコミュニケーションとの間にも弱い正相関がみられ、一方、疎外と体調不良との間に弱い正相関がみられた。コミュニケーション、信頼が高いと大学にうまく適応していること、疎外は苦戦とつなが

りやすいことが示唆された。また、大学適応の補助指標SPSI-R肯定的問題定位PPOとコミュニケーションとの間に弱い正相関がみられ、否定的問題定位NPOと疎外とに正相関がみられた。コミュニケーションが高いと問題に対して積極的な姿勢をもつ、逆に、疎外が高いと問題の取り組みに消極的・否定的な姿勢をとる傾向がある。この傾向が大学生活への適応不適－不適応に関連する可能性が示唆された。

〈対人関係の類型と大学適応〉どのQOSL下位尺度においても類型間で得点に有意差は示されなかった。数値としては、生活充実感と将来展望は多焦点型が最も高く、一匹狼型は最も低かった。多焦点型が大学期における適応的なタイプであることがここからも示唆された。また、一匹狼型の適応困難傾向も示唆された。大学適応の補助指標として用いたSPSI-Rでは、合理的問題解決RPS尺度得点で母親型と恋人型の間に有意差がみられた。恋人型は母親型に比べて有意にRPS尺度得点が低かった。また、数値的には不適応に直結する方略と考えられる回避方略AS尺度得点では一匹狼型が他の類型より高く、一匹狼型の適応困難傾向が示唆された。

4. 総括と今後の課題

本研究において、現代の女子大学生の対人関係の様相、大学への適応の様相を示すとともに、対人関係類型と適応の関係を検討した結果、これまでの研究同様、一匹狼型が適応に問題を持つことが示された。また、従来、その他として一匹狼型とまとめて表示されていた多焦点型が現代の大学期女子大学生の適応的なタイプであることも示された。そして‘仕事を持ちながら子育ても’という社会人としての女性のスタイルが一般化しつつある今、「恋人と友達」「母親と友達」等多くはないが複数の最重要対象を持つ多焦点型の増加は、時代の要請であり、現在（大

学期)の対人ネットワークが将来(社会人期)の親しい人間関係を調整していることを示唆した。

しかし、今回の調査は一校内、限られた学科で行われた。女子大学生の対人関係の類型分布、大学への適応に関しては、様々な形態の大学、様々な学科で、横断的、縦断的調査を行い、今回の結果をさらに検討していく必要がある。

また、対人関係の類型に関して、今回は特に「多焦点型」に焦点が当てられた。恋人型に関しては、井上・高橋(1999)において「相対的に適応が良いといえるが、測度によってやや異なる傾向がみられるため、今後さらなる検討が必要である」と述べられている。今回の調査でも、有意差が示されたのは適応の補助指標SPSI-Rの(母親型の比としての)合理的問題解決の低さであるが、数値的には自信欠如が類型の中で最も高く、適応にはやや問題を抱えている。ただコミュニケーションは多焦点型の次に高いなど、測度によってやや異なる傾向がみられた。今後さらに検討していく必要があるだろう。母親型に関しても同様のことが言える。1年次における母親型と4年次における母親型の同異についても検討する必要があると思われる。なお、今回、仲間への愛着IPA尺度を再構成し使用したが、項目数を含めこの尺度をさらに検討していくことも必要である。

文献

- 1) 佐藤典子 2001 音楽大学への進学理由の認知と進学後の適応について 教育心理学研究, 49, 175-185.
- 2) 小林哲郎・高石恭子・杉原保史 2000 大学生がカウンセリングを求めるとき ミネルヴァ書房
- 3) 大久保智生 2005 青年の学校への適応感とその規定要因—青年用適応感尺度の作成と学校別の検討— 教育心理学研究, 53, 307-319.
- 4) 磯部有希・上村佳世子 2007 大学への進学動機と学校適応感との関連 文京学院大学人間学部研究紀要 Vol. 9, No.1, 51-61.
- 5) 大久保智生・青柳肇 2004 中高生用学校生活尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 日本福祉教育専門学校研究紀要, 12, 9-15.
- 6) 吉岡和子・高橋紀子 2010 大学生の友人関係論—友だちづくりのヒント— ナカニシヤ出版
- 7) 山田剛史 2013 現代学生の「移動」問題—在学中に進路変更を希望する学生の実態と背景— 第2回大学生の学習・生活実態調査報告書 ベネッセ教育総合研究所 20-21.
- 8) 谷田川ルミ 2013 現代の大学生の人間関係—「先生」「友だち」の存在が大学への着地を促す— 第2回大学生の学習・生活実態調査報告書 ベネッセ教育総合研究所 22-23.
- 9) 井森澄江・伏見友里 2015 女子大学生における人間関係の枠組みと親準備性 東京家政大学附属臨床相談センター紀要, 15, 33-47.
- 10) Takahashi, K. 1990 Affective relationships and lifelong development In P. B. Baltes, D. L. Featherman & R. M. Lerner (Eds.) Life-span development and Behavior, Vol. 10 Hillsdale, NJ : Erlbaum, pp 1-27.
- 11) Takahashi, K., & Sakamoto, A. 2000 Assessing social relationships in adolescents and adults : Constructing and validating the affective relationships scale. International Journal of Behavioral

- Development, 24, 451-463.
- 12) Armsden, G., & Greenberg, M. T. 1987
The Inventory of Parent and Peer Attachment: Individual differences and their relation to psychological well-being in adolescence. *Journal of Youth and Adolescence*, 16, 427-454.
 - 13) 中澤潤・榎本淳子・中道圭人 2007 社会的問題解決が大学生の適応に及ぼす影響
千葉大学教育学部研究紀要, 55, 61-69.
 - 14) 加藤厚 1983 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究, 31, 292-302.
 - 15) 伏見友里・井森澄江 2017 女子大学生の自我同一性地位と社会的問題解決能力との関連
東京家政大学附属臨床相談センター紀要, 17.
 - 16) 高橋恵子 2002 生涯にわたる人間関係の測定—ARSとPARTについて 聖心女子大学論叢 98, 101-122.
 - 17) 高橋恵子 2007 人間関係の生涯発達理論—愛情の関係モデル マイケル・ルイス、高橋恵子（編）愛着からソーシャル・ネットワークへ 新曜社 73-104.
 - 18) 高橋恵子 2010 人間関係の心理学 愛情のネットワークの生涯発達 東京大学出版会.
 - 19) 井上俊哉・大井京子・西村純一・井森澄江・齊藤こずゑ 2006 親子関係の生涯発達心理学的研究Ⅱ—PBIとIPAの尺度の再検討— 東京家政大学研究紀要, 46, (1), 245-251.
 - 20) 福盛英明・峰松修・一宮厚・馬場園明・永野純・上園慶子・藤野武彦・丸山徹 2002 大学生のQOLの研究（2）簡易版「大学生チェックカタログ45」の開発と実施
平成12－13年度科学研究費補助金研究成果報告書大学生の生活の質（Quality of Student Life）に関する研究—「大学生生活調査カタログ」の開発（代表者 峰松修） 13-32.
 - 21) 井上まり子・高橋恵子 1999 女子大学生の対人関係の類型と大学生活での適応 日本心理学会第63回大会発表論文集 p91.
 - 22) D'zurilla, T. J., Nezu, A. M., & Maydeu-Olivares, A. 2002 Social problem-solving inventory-revised (SPSI-R). New York: MHS.

Abstract

Formation of Close Relationships and Adjustment Among Contemporary Students in a Women's University The purpose of the present study is to investigate contemporary formation of close relationships by adolescent girls and to relate that with adjustment to college life. We surveyed 222 students at a women's university through a questionnaire on a face seat, the ARS (affective relationship scale), IPA (inventory of peer attachment), QOSL (quality of student life), and so forth. Based on analysis of data on the ARS, the majority of students are shown to have significant others, ordered according to a hierarchy, with one focal figure. However, several of the students, qualified as the lone-wolf type, showing extremely low ARS scores, with no significant others. Comparing analysis of the ARS in 1999 by Inoue and Takahashi, the

percentage of the lone-wolf type is unchanged and entails a decrease in the likelihood of a romantic partner type and an increase in the likelihood of a friend type, a mother type and other types consisting of a tie type and a multiple type in percentage terms.

Analysis of the IPA's data also shows that the majority of students, perceiving some conflict and mistrust, attain communication and build a relationship of trust. The analysis also shows that a high score on IPA communication is attained by students of other types, whereas a high score on trust is attained by students of the friend type.

The common image of the students that emerges from analysis of the QOSL's data is that students maintain good health, have a sense of fulfillment, and envisage the future, but lack confidence.

Both scores on the fulfillment of life and future outlook were lowest among students of the lone-wolf type and highest among those of the friend type. The lone-wolf type of students have difficulties with adjustment, and the students of other types are most accommodative to college life.

There has recently been an increase in the number of women working outside the home and raising children, and this is widely recognized as a lifestyle choice for women. This, increases the likelihood of students being of other types, including types with plural focal figures such as a friend and a romantic partner, or a mother and a friend. The growth of the other type is a demand of the times in the sense that interpersonal skills during college life lead to familiar relationships within society.

Keywords : adjustment, contemporary students in a women's university, formation of close relationships, inventory of peer attachment, questionnaire

